

燕種類

メといふ是也、兼名苑を引て、燕に胡越二種あり、漢語抄に、胡鷺子ア。マドリ。といふと註せし者、即今もアマドリといふなり、義並に不詳、或人の說に、ツバクラメとは土食なり、アナクラメとはツバクラメとこそいひつれ、ツバメとは後の人其語を省きて呼びし名也、古語にツバと云ひし詞は、前の海石榴の語也、其毛色の光りて黒みたれば、ツバクラメと云ひし名也、メとは古俗に鳥を呼びし語には胡燕とかきてアマドリとよめり、此鳥は雲の中にすみて、大かた人にも知られぬ鳥也。(中略)と見えたり、もし此說に依らむには、アマドリといふは、アマとは天なり、天にすむ鳥と云ふ義なるべし、されど此鳥は東海の地方にて、雨を占ふ鳥なり、雨ふりなむとするに、此鳥雲中に翻り飛んで啼く也、その大きなるは、鳩よりは小くして、燕の如くなるなり、アマとは雨の義とこそ見えたれ。

〔本朝食鑑

五
原禽訓豆波久良米

或曰豆波米

集解、燕大如雀而身長、玄衣白腹、紫領岐尾、身輕翼捷、反轉上下無不自由、春社來秋社去、其來也啣泥巢於屋宇之下、其去時伏氣蟄於窟穴之中、凡一營巢之家、年年依舊而不相忘、若一年不營巢、則其家必殃、燕比于雀亦似有智、能識人情而馴近、預擇鷲鳥不至處而營巢、然雛出巢後羽翮軟弱爲鷲鳥被擊、其既長而羽翼固定後、鷹鵠亦不能鷙之、或曰、鷹鵠食燕則死、予必大平野未詳之、又有白燕最希、然未足爲祥瑞也。

〔本朝食鑑

六
華和異同

燕

京房易占曰、人見白燕主生貴女故燕名天女、今偶見白燕、未有其應、還使網撻而捕之、竟鎖籠以待價之貴、或爲貴人之弄耳、是據史記所謂簡狄祠於高禖有玄鳥遺卵吞之生契之言乎、凡春來秋去、世有渡海之說、是據撫遺謂王樹至烏衣國之言乎、文昌雜錄曰、昔年因京東開河、岸崩見蟄燕無數、晉郗鑒爲兗州刺史鎮鄆山、百姓饑饉、或掘野鼠蟄燕而食之、乃知燕亦蟄爾、驚蟄後中氣乃出、非渡海也、晉郗鑒集曰、余曩歲冬聞吳興山中營、先隴闢一山路、路傍有數巨石、其穴頗深、試令僕輩廝之、見鷺燕蟄於其間者甚衆、急掩之曰、驗文昌之言爲是、而撫遺之說爲非也、李時珍亦以渡海爲謬談、或語予曰、僕秋末遊河西時、舟泊備前之海岸、日既欲夕、揭蓬窓望岸上、見數百燕並頭于巖窟口、驚問舟子、舟子曰、是燕